

「江戸時代の俯瞰図」を手 に名古屋城を歩こう！

元禄時代の名古屋城を正確に復元した俯瞰図を、建築家の川地正数氏が制作されました。「金城温古録」および「昭和実測図」を元にしています。北見昌朗は、それをポスターにして無償配布しています。それを手にしながら、名古屋城を歩くイベントを開催します。

日時：平成28年10月23日（日）

午後14時から16時 雨天決行

集合場所：正門入口（入場せず外でお待ち下さい）

講師：栗田正昭氏（名古屋城観光ガイドボランティア）

参加費：無料。入場料は各自お支払下さい。俯瞰図を印刷したポスターは無料配布。

申込：事前の申込必要なし。自由参加

回る場所：①天王社・東照宮神社跡（金シャチ横町）②本丸の南側（幕末に撮った写真には多聞櫓が映っており、現在と見比べる）③大手馬出の跡④大手枡形の跡⑤東北隅櫓の跡⑥二の丸御殿（幕末の写真あり）の跡 等々

天守閣の木造復元とか、本丸御殿が話題になっていますが、名古屋城はそれだけではありません。その偉大さがわかるようになります。

主催：名古屋城天守閣を木造復元し、旧町名を復活する会

当日の連絡先：北見昌朗 携帯 090-7856-8740



川地先生のご説明

本物の名古屋城を世界遺産にしよう！

家康は 70 才も近くになり何としてでも徳川政権を盤石なものにする為には、関ヶ原の役で勝利し天下の政権を勝ち取った後も大坂城に残る秀頼の存在は大きな脅威であり、万が一豊臣の息のかかった大名が一致団結し秀頼を盛り立て江戸に向かったら・・・、それを何としてでも阻止する為、極めて短期間のうちに最大かつ最強の軍事要塞として名古屋城を築城する必要があった。

そして家康自らの手による名古屋城の大凡の完成は、京都方広寺の梵鐘の銘文事件を口実に大坂冬の陣・夏の陣を起し遂に豊臣家を滅ぼし、元和偃武（げんなえんぶ）の願いから元号を元和に改め、応仁の乱から始まり 150 年間続いた戦国の世を、天下泰平の世にした新しい時代の幕開けとなる切っ掛けを作った。

この最大にして最強かつ最後の軍事要塞であった名古屋城の史実に忠実な復元が実現すれば、**この様に歴史を変えたという意味で世界遺産に値する城であると言っても過言ではない。**

（家康は徳川政権を盤石なものにし元号を元和に改めた翌年（元和二年）に駿府城にて 74 才で逝去した。）

この名古屋城の地形は、周囲から 10m ほど高く固い地盤の名古屋台地の西北端に位置し、小牧、犬山、岐阜、さらには関ヶ原から養老山系の遠望を見渡すことが出来る絶好の地であった。またこの地の北と西は断崖により深井（ふけ）と呼ばれる低湿地帯が広がり、重装備の大軍を寄せ付けない自然の要塞でもあった。

このような地形における名古屋城の城作り（縄張）は、それまでの城作りとは異なり

「今までにない大砲のような破壊効果の大きな武器に耐える」 また、**「数万を超える大軍勢に耐える」** 城作りであった。

具体的には、名古屋城の特徴は直線と直角を基本とするシンプルな**縄張**で構成され

南に広がる広大な三之丸（南北 600m、東西 1400m）により、大坂冬の陣で使用された大砲では、本丸は射程圏外であった。また城の北及び西には前述の深井と呼ばれる低湿地帯により、本丸の射程圏内に近づくことはとても困難であった。

また万が一三之丸が突破された場合に備えて、各郭のずれが生み出す多くの罅線（堀）の出入りにより横矢が可能になり、さらに本丸の南と東に配置された巨大な馬出があり、その内側にはそれぞれ嚴重な枡形虎口があり、本丸への進入を阻む鉄壁な守りとなっていた。そして 100 間四方（200m 角）の本丸

の特徴として、四隅に天守を含めて隅櫓が配置され、それらを繋ぐ多門櫓の四周配置により、相手に知られることのない移動により、完全な面的防御と重層的攻撃が可能になっていた。

特に天守の外壁は、土壁の厚さが 30 cm（1 尺）あり、その内側に厚さ 12 cm（4 寸）の檜板の鎧張りを施し、大砲等による防弾・防火対策として万全な壁構造となっていた。

最後に各郭の機能（役割）としては、

- ・二之丸 一二之丸御殿（御城）藩主の住居と政治の場（藩庁）、二之丸庭園
- ・西ノ丸 一番蔵から六番蔵に至る土蔵があり、米蔵として使用
- ・御深井丸 一弓矢櫓、鉄砲蔵、弾薬庫、塩蔵等
- ・御深井御庭一吹上御苑のモデルにもなり、桂離宮に匹敵する諸施設（松山御茶屋・瀬戸御茶屋・竹長押御茶屋）があった。